

# でかい仕事にくらつく

それは東京の老舗ホテルの仕事だった。2003年、外資が入って全面リニューアルすることになり、それをマリさん（築山万里子さん）と美香さん（村上美香さん）、30代半ばの2人が関わったのだ。

美香さんの知り合いのクリエイターがそのプロジェクトの大役を担うことになり、手伝って、と美香さんに電話してきたのだが……。 「なんやおっかいねん、おっかいことやらなあかんねん、て。全然わからへん」と美香さんは笑う。ロゴやパンフレット、スイーツショップのパッケージからなにから一新するという仕事だったが、自分はクリエイティブに徹したいから、マリさんにプロデューサー役を頼んだ。「だから私は楽できたけど」と美香さんは言う。じゃあマリさんは？

「7月アタマに呼ばれて、9月までの3カ月で全部やれと。トップが女性で、やりとりは全てメール。とにかくびっくりするスピードで進める。ついていくのに必死」

撮影の段取りからお金の管理など、仕切るのがマリさんの仕事。「ちゃんとできたかわからないけど、あの仕事で鍛えられました。成長させてもらった」。でかい仕事は、人を成長させる。そのあとのでかい仕事も「そんなにびびりませんでした」と不敵に笑うマリさんなのである。

もはや、泣き虫だった頃の面影是一片もない。

マリさんのアサヒ精版印刷と、美香さんの「株式会社一八八」が組んで毎年開いていたアートイベント「629」は、10年目の2010年が最後となった。大阪中のクリエイターが集まった会場には、マリさんの「印刷の現場の現場」と題した一文が掲示された。

その中でマリさんは自問する。技術が進んでめまぐるしく変わっていく印刷業界にあって、印刷機を持たないアサヒ精版は何ができるのか？

「うちでしかできないこと、って正直ないのかもしれない。でも、うちだからできたこと、っていっぱいあるような気がする」

デザイナーや作家、クライアントと工場の職人さんたちとの仕事とは？

「こだわりを実現すべく方法を考え、一緒に作っていく作業。共にお仕事させてもらっているあらゆるクリエイターのみなさん、工場の職人さんたちとの共同作業がうまくいってこそ、『いいお仕事だった』という結果が生まれてきたのだと思う」

決意表明のようでもあるし、アサヒ精版の進むべき道を示しているようでもある。このころ、マリさんには新しい仕事との出会いがあり、それが新たな境地を開くことになる。



今はない大阪・フェスティバルゲートで2003年6月に開いた「629」で展示した「いろは障子」。美香さんが書いた48通りのコピーを、クリエイターが障子紙風にデザインした。この3カ月後、東京のホテルのリニューアルオープンでも展示された